

20. 転換期の今できること

医事万華鏡

今、われわれ人類は新型コロナウイルスや、天変地異など多くの難題の前に立たされています。ただその予兆は2年前にはありました。

すでに2018年の夏、日本は記録的な暑さを記録し、大きな災害が相次ぎました。振り返ると、6月にはマグニチュード6.1の大阪府北部地震が発生。7月には西日本を中心に豪雨に見舞われ、死者200人を超える大惨事となりました。また9月初旬には大型台風21号によって関西国際空港が水没、その1週間後の北海道では、最大震度7も地震が発生しました。実に、2018年を示す「今年の漢字」は、「災」でした。そして2019年、令和という新たな御代を迎えたわれわれは、ひとえに「和」の時代を期待していたのにも拘わらず、多くの災害に見舞われることになりました。

そしてさらに2020年は、年初より新型コロナウイルス感染症を世界中が席卷し、普通の暮らしができなくなり、価値観が覆される事態に見舞われました。もちろんその渦中にいるわけですが、それ以外にも、日本では九州熊本地域を中心に豪雨被害に見舞われ、亡くなられた方も多数い

ます。豪雨被害は中国にも及び、雨が降ること

も少なく、慢性的な水不足に晒されてきた中国の北京が、建国以来最大の豪雨に見舞われました。一方、ロシア・シベリアのサハ共和国ベルホヤンスクは、気温が摂氏38度に達し、北極圏で過去最高気温を記録しました。ここ数カ月、異常な高温が続いているようで、今、北極圏は世界平均の2倍の速さで温暖化が進んでいるとも考えられています。

さて、天変地異は大転換を意味することを、歴史が教えてくれています。すると、2020年はまさに大転換の入り口となる時代といえ、人類がその未来の方向性を見定める時を迎えていると言えそうです。しかしそのためには、徒にこうした天変地異に打ちひしがれるのではなく、戦略的に意図を定め、新たな創造に向かう姿勢が求められていると言えそうです。つまり、起きてしまったことをただ嘆くのではなく、そこに「意味」を見出し、死から再生へと転化させていくことです。フランスの哲学者アランもまた、悲観は感情、楽観は意志である、という言葉を残してくれています。

未来を形づくるのは、意図を定めてからです。ただ、そのためには問題にどっぷり浸かった状態よりも、俯瞰した状態に身を置かなくてはなりません。解き放たれた矢はおのずと定めて飛んでいくものだからです。(JMS主幹・野村元久)

